

支那賦也

カマシム ドコロ

正野の國

リトル・カワカミ社

ヤマシタ・コード・もくじ

プロローグ	6
第一章 武者顔の男	22
第二章 ガーデン・パーティ	61
第三章 ハニー・トラップ	88
第四章 一枚の写真	100
第五章 ヤマシタ・コード	114
第六章 尾行者	130
第七章 ロマノフ王朝の金塊	149
第八章 亡命者	178
第九章 狙撃兵	197
第十章 赤い実の成る丘	221
第十一章 国家警察	243
第十二章 元宝石商	

第十三章 最後の当番兵	268
第十四章 皆殺しの歌	285
エピソード	312
引用文献	336

●スタッフ●

○編集

佐田 満

○表紙

yuki

○画像処理

デザインオフィスはな

○カバー

宇田川森和

一九八六年二月二十二日から二十五日にかけて、フィリピンで起きた政変は、「エドゥサ革命」、または「ピープルズ・パワー（人民革命）」と呼ばれる。

「エドゥサ（EDSA）」とは、「エピファニオ・デ・ロス・サントス・アベニュー」の頭文字を取った略称で、マルコス子飼いのエンリレ国防大臣とラモス参謀総長の二人が、マルコスに背いて立て籠もったアギナルド基地とクラメ基地は、この大通りを挟んで互いに向かい合っている。

革命の直接の引き金になったのは、同月七日に行われた大統領選挙の結果発表だった。

民間の選挙監視団体、自由選挙のための全国運動が、「コーリー・アキノが八十万票差で勝利」と判定したのに対し、マルコスの息がかかった中央選挙管理委員会は、「マルコスが百六十万票差で勝利」と発表した。

マルコス陣営による、あからさまな得票数操作に対し、野党連合は、もちろん、アメリカ政府、そして、フィリピンで大きな影響力を持つカトリック教会からの非難の聲が高まる中、開票に不正があったとするエ

ンリレとラモスは、二月二十二日夕方、「もはやマルコスは我々の総司令官でも大統領でもない」と宣言し、国軍の改革派将兵とともに、この二つの基地に立て籠もった。

これを知ったマルコスの懐刀、ヴェール国軍総長は、宮殿警備軍を強化し、フォート・ポニーファッシュから戦車を繰り出し、鎮圧に乗り出した。

事態が内戦の様を呈し、国軍相打つ状況になるのを案じたカトリック教会のシン枢機卿が市民に改革派支持を呼びかけ、それに応えた百万を超える市民がエドゥサに繰り出し、マルコス派部隊の行く手を阻んだ。

市民が登場することによって人民革命へと変質した政権争いは、二月二十五日夜、アキノを支持する民衆によってマラカニアン宮殿を取り巻かれたマスコスが、米軍のヘリコプターで脱出し、ハワイに亡命したことにより終結した。

プロローグ

一九九八年七月十日、ホノルル、スター・ブリテン紙。

『フィリピン大統領、フェルディナンド・マルコスの護衛に人生の大半を捧げたアートロ・アルイザ大佐は、一年にわたるガンとの戦いに敗れ、昨日、ラスヴェガスの病院で他界した。享年五十六歳。

ハワイ一の牧場主であり、ハワイのゴッド・ファーザーと呼ばれるチャーリー・マハンは、アルイザを「真の友、完璧なプロ、そして真つ正直な人だった」と評し、「彼のマルコスに対する忠誠と奉仕は、信じられないレベルのものであった。私はアート（ニックネーム）を心から尊敬している」と述べた。

マルコス政権の崩壊直前、マルコスがマラカニヤン宮殿のバルコニーで最後の演説をしている有名な

写真には、マルコスの右肩越しに民衆に鋭い視線を向けているアルイザが写っている。

この二日後、マルコスの搭乗機がホノルルに着いた時、病身のマルコスの手を取り、飛行機から降ろしたのは、他の誰でもないアルイザだった。アルイザは、一九八九年、マルコスが死を迎えるまで、その側を離れたことがなかった。

（中略）

アルイザは、一九九一年、ハワイを離れ、ラスヴェガスに近いネヴァダ州、ヘンダーソンに移り住んだ。

遺灰は、娘のアンとヴァネッサがフィリピンに持ち帰り、クラスメートたちの手により故郷、パンガシナの野に撒かれることになっている。』

——一度見舞いを、と思っているうちに、アートは逝ってしまった。あいつのことだ、あっちでも、マ

ルコスの側で、あの鋭い目を光らせているに違いない。

ポリネシア人によくある褐色を帯びたアンコ型の体軀をしたマハンは、手にしていた新聞から目を離し、マルコスに初めて会った時のことを思い出していた。

——あの時、アートは、俺の半分ほどの小さい身体で、俺に飛び掛かろうとしていた。彼は、常に、マルコスを守るために身体を張っていた。

連邦政府からの依頼で自分が経営者する警備会社がマルコスの警備を引き受けることになり、マキキの丘の上にあるマルコス邸を訪ねた時のことだった。重い腎臓病を押して面談の場に現れたマルコスの声は小さく聞き取りにくい。マハンが、言葉を捉えようと、上半身をマルコスの方に傾けるたびに、脇に控えていたアルイザが、マハンを取り押さえようと思えばかりの様子を示したのだ。

——マルコスが死んで九年。ヴェールも肺気腫で死の床に付いているという。あの革命騒ぎの当事者が、一人また一人と、向こうに行ってしまう。ヴェールもマルコスと同じように、都合の悪いことを、すべて墓場まで持つて行くつもりのようなのだ。その点、アートは立派だ。公正な立場で歴史の証人を演じて逝った。あいつは、歴史の証人という意味でも、真つ正直な男だった。

その話の公正さと確かさを買われ、マスコミから頻繁にインタヴューを受けていたアルイザの顔を思い浮かべたマハンは、「マルコスの生涯で一番長い日となった、一九八六年二月二十五日は、真夜中の火花で始まりました」で始まったアルイザの話を思い出した。

それは、マルコス政権の崩壊とマルコス逃亡の噂を聞いた市民の手による打ち上げ花火や爆竹だった。だが、その時点では、マルコスは、まだ、政権を放

棄するつもりはなく、武力で革命軍を鎮圧しようとしていた。しかし、レーガンから「革命軍の血が一滴でも流れるようなことがあれば、アメリカ政府は、あなたの支援をやめる」と言い渡されていたマルコスに打つ手はなかった。

一方、革命軍は、武力行使をすることによって、民衆が自分たちから離反するのを恐れていた。

自然、戦いはマスコミ合戦となった。マルコス陣営は、政府お抱えのテレビ局から反乱軍がマルコス一家を虐殺しようとしているというプロパガンダを流し、革命軍は、マルコス軍によって殲滅されそうになっていると、ラジオを通じて市民に支援を求めた。

午前十一時四十六分、両軍の睨み合いが続く中、クラブ・フィリピンでアキノが大統領就任の宣誓を終えた。

その九分後、マルコスは、マラカニアン宮殿内の

セレモニアル・ホールで大統領就任の宣誓をすませ、バルコニーに立った。

結果的に最後のものとなったマルコスの演説に、二千五百人ほどのサポーターは「戒厳令、戒厳令」の大合唱をした。しかし、イメルダが、自分の愛唱歌「ダヒルサヨ（ビコーズ・オブ・ユー）」を唱和させ、姿を消したのをピークに、サポーターは、三々五々宮殿を去り、それに代わり、アキノを支持する民衆が宮殿を取り巻き、宮殿を警備する海兵隊と睨み合いを始めた。

その緊張をニュース・メディアが世界に伝える。それを見たマニラ市民が、我こそはと宮殿をめがける。それをまた、ニュースがリアル・タイムで伝える。市民は雪崩のごとく宮殿に向かった。

午後五時、マルコスは、三十九度の熱を出してベッドに横たわっていた。主治医が止めるのも聞かず病室に入ったアルイザが、「暴徒が宮殿に侵入するの

は時間の問題です。そうなたら大虐殺が起こりま
す」と直言した。

その言葉を信じたマルコス、看護婦の手を借り
て立ち上がり、エンリレに電話をするようアルイザ
に命じた。

エンリレ、駐比米国大使ボスワース、マルコスと
の間で、何度か電話のやりとりがあつた後、午後六
時過ぎ、三者間でマルコスのハワイへの亡命が合意
された。

午後七時、米国大使館は、宮殿を出るまでに二時
間の時間を与えることをマルコスに伝えた。

午後九時五分、マルコスとイメルダ、そして二人
の荷物を載せた米軍の大型ヘリコプターが、マラカ
ニアン・パークを飛び立った。

都合、六機のヘリコプターで宮殿を脱出したマル
コス一行は、クラーク・エア・フィールドで一夜
を過ごした後、グアム経由でハワイに向かった。

アルイザの死から八年、マルコスの亡命劇から二
十年が過ぎ、ハワイの人々の記憶からマルコスの姿
が消えかかっていた二〇〇六年十月のある日、チャ
ーリー・マハン、パール・ハーバーを眼下に望む
ことができるマハン・ピルの最上階にあるオフィス
に日本からの訪問者を迎えた。

オフ・ホワイトの麻のスーツに身を包んだ男は、
「日本政府内閣府参事官 島津正義」と印刷された
名刺を差し出し、時間を割いてもらったことへの謝
辞を述べると、勧められた椅子に座るのももどかし
そうに、アタッシュケースから新聞のコピーを取り
出した。

何千もの人の上に立つマハン、短時間に人を観
察するのを習性としている。

——服はイタリアンカットだ。ブランド物だろう。
アタッシュケースはヴェイトン。腕に嵌めているのは

ロレックスか。公務員にしては持ち物が高価すぎる。エルメスのオードトワレを匂わせているのも、目立たないことをもってよしとする公務員らしくない。

英国式の格式ばった付き合いを嫌うアメリカでは、初対面の相手に、自分をファースト・ネームで呼ぶよう伝えることが多い。しかし、マハンはこの男にそれをしなかった。トップ・ビジネスマンとしての経験と、外国人による被搾取の歴史を持つアイランドーの本能がそうさせたのだ。

——昔、セッシュー・ハヤカワというハリウッド俳優がいたが、あの系統の顔だ。日系人はこういう顔をサムライ顔と言っていた。こいつは著名な武家の出なのだろうか。たしか、封建君主をダイミヨウと言ったはずだ。……とにかく、尋常ではなさそうだ。などと、日系の友人から聞いた話をベースに値踏みをしていると、男は、白髪が目立つ前髪をかきあげ、記事の説明を始めた。

「一九九一年九月十三日付けのソヴェト連邦の政府機関紙イズヴェスチャで、ソ連外務省外交研究所シロトキン教授は、ソ連政府は、ロシア革命後の混乱時に満州駐留の日本軍を経て日本国内に渡ったロマノフ王朝の金塊の返還交渉を日本政府と行うべきだと発言しています。これがその記事です」

手渡されたコピーのところに、RやNの鏡文字が並んでいる。ソ連の新聞であるのは間違いないさそうだ。しかし、ロマノフ王朝の金塊は初耳だ。マハンが、突然聞く話に相槌も打てずに沈黙していると、男は、委細かまわず、説明を続けた。

「ソ連は、このすぐ後に崩壊しましたので、話は立ち消えになりましたが、最近、日本政府内でも同じような動きが生まれました」

と言って、言葉を切った。

「……」

マハンは、何を質問したらいいのかさえ思いつか

ない。「ソー・ワット（それがどうした）？」と言おうとしたら、男が話を続けた。

「この九月に誕生した安倍政権が掲げる改革の一つは、現在、約六・七トリリオンドル（六七〇兆円）ほどある国債の早期返済です。その一つの手立てとして、日本政府も、ソ連政府と同じように、マルコスが掘り出した、とイメルダが証言している九〇ビリオンドル（九兆円）相当の山下財宝の返還をフィリピン政府に求めることを検討することになり、内閣府に首相直轄の非公開プロジェクトができました。自分は、その一員で、現在マルコスに関連した方々事情を聞いて回っているところです」

——山下財宝だって。何たる寝言だ。時代錯誤も甚だしい。たしかフィリピンの国家予算は四〇ビリオンドル（四兆円）ほどのはずだ。よしんば、マルコスの話が本当でも、フィリピン政府には、それを返還する能力はない。日本政府が手を染めるには、

あまりにも非現実的な話だ。これは要注意だな。

ハワイの大牧場主であると同時に、いくつもの会社を経営するビジネスマンとしてのマハンの勘が警告を放っている。

「失礼ですが、ミスター・シマツ。あなたは本当に内閣府から派遣されたのですか」

マハンが、名刺を手に、男の目を穴が開くほどに見つめながら聞いた。

「はい、内閣府に問い合わせさせていただきました結構です、と言いたいのですが、残念ながら非公開プロジェクトですので、それは不可能です。代わりにこれを見て下さい」

男は身分証明書を差し出した。名刺大のプラスチックでラミネートされたカードの上部に「Cabinet Office, Government of Japan」。その下に「Counselor Masayoshi Shimazu」とあり、本人の写真が付いており、本人と安倍首相のサインが入っている。別段、

疑わしい所はない。

「サンキュー。……しかし、私は、マルコスとは、一、二度挨拶を交わした程度の付き合いしかない」

身分証明書を手渡しながら答えた。

「それは、重々承知です。じつは、ここに来る前に、ネヴァダ州、ヘンダーソンに寄って、アルイザ大佐の未亡人に話を伺いました。しかし、家では仕事の話をしたことがないということでしたので、ご主人と親しかった方の紹介をお願いいたしましたら、マルコスの護衛業務を委託されていた会社のオーナーである、マハンさんを推薦してくださいました」

マルコスは、ジョンソン以降の歴代アメリカ大統領と親しかった。それは、フィリピンに對ソ戦略上欠かせない米軍基地があったからなのはもちろんだが、マルコスがそれぞれに多額の選挙運動資金を提供していたからでもある。レーガンも例外ではなかったが、フィリピン国民が追い出したマルコスを国

費で護衛したのでは、癒着があらさまになる。マルコスの護衛は、マルコスの自腹で、民間に委託されることになり、「ハワイ・セキュリティ・コーポレーション」というマハンの会社が受託した。

その関係でアルイザと親しくなったマハンは、アルイザが纏めたマルコスの脱フィリピン録、『フェルディナンド・E・マルコス……マラカニアンからマキキヘ』の出版を援助したこともあり、アルイザから、微に入り細に入り、あの日の出来事を聞いている。マルコスが、イメルダに尻を叩かれ、軍を使つて、マニラ湾に沈んでいる日本の軍艦を調査したところや、旧日本軍の基地周辺を掘りまくったことも聞いている。「あれが山下財宝なのだろうか」と思うが、初対面の男に、オフレコに近い話をする気にはなれない。アルイザの未亡人、エレノアのことを聞いたが、エレノアは、毎年欠かさず、クリスマス・カードで近況を知らせてくれる。もうすぐその時期だ。

そんなことより、このわけが分からない男を何とかしたい。

「私なんかより、マルコス of 側近に話を聞いたらいいだろ」

言葉に棘を含めて言ったつもりだが、堪えた様子はない。

「はい。私もそう考えたんですが、マルコスと一緒に亡命したのは、合計八十九名です。とても手が回りません。私どもの調査によれば、マハンさんは、マルコスの最後の日を克明に記したアルイザ氏の本の出版に尽力されています。我々は、アルイザ氏が記録に残さなかったこと、いや残せなかったことをあなたに話していると考えています。そのあたりのことを伺いたいです」

——おやおや、こいつは、単に、いいとこの息子とただけではなさそうだ。一応の調査はしているよ
うだ。

「二十年前の話だ。記憶のファイルが消えかかっている」

と答えたが、ハワイのゴッド・ファーザーと言われる身だ。遠来の客に対し礼を欠くのは憚られる。取りあえず当たり障りのない話を、と思い、目を細め、アルイザの鋭い目付きを思い浮かべながら、記憶の糸を手繰った。

——いつだったか、今と同じように、記憶のヴィデオを早回しをしたことがある。あれは……そうだ。アートの死亡記事を見た時だった。

などと思いつながら、記憶のヴィデオを再生しようとするのだが、二十年ほどの時間がそれを困難にしている。

——人間の記憶は選択的。自分に都合の良いことや興味があることは覚えているが、そうでないことは忘れる、というのは本当のようだ。

などという雑念が浮かぶだけで、これというエピソード

ソードが浮かんでこない。

男は、先ほど、秘書が運んできたコーヒーを飲んでる。マハンの記憶が蘇るのを、じっと待っているようだ。どつしりと腰を落ち着け、コーヒーを啜っている男から、今まで多くの修羅場を潜り抜けてきたマハンが経験したことの無い圧力のようなものが伝わってくる。この男に答える義理などないのだが、なんとなく焦りを感じる。

——そうだ。

マハンは、アルイザから聞いた、取って置きの話を出した。財宝と関係のない話だが、スクープになる話だ。

「あの政変は、じつは、クーデターだったんだ」

エンリレは、二十二日の朝現在、翌日午前二時を期して、五人の部下が率いる兵と共に、マラカニア宮殿を襲撃し、マルコスとヴェールを謀殺するつもりだった。計画への参加を求められたラモスは、

クーデターでは民衆の心を掴むことはできないと判断し、国軍内部の改革派がマルコスによって肅清される、すなわち、マルコス圧政の被害者を演じるといふ筋書きに変更させ、それに加わった。

ところが、エンリレのクーデター計画は、改革派内部にいたスパイの手でマルコス側に漏れていた。計画を知ったヴェールは、反乱軍を宮殿前で迎え撃ち、一味を一網打尽にするための陣をしいた。しかし、ヴェールが布陣し終わった時には、二人は、改革の旗印を掲げ、基地に閉じ籠もり、民衆に応援を呼びかけていた。先手を取ったはずのヴェールは、なまじっかスパイを使ったために、後手を引いてしまったのだ。

マハンは、「あれがクーデターだったら政変は起きていない」と伝えようとしたのだが、男は興味を示さない。別な話を思い出さざるを得ない。

——オフレコの話だが、もう時効だ。あれを話して

やろう。

「アートは、マルコス転落の原因はイメルダの物欲にあると信じていた。とくにマルコスが腎臓を患ったからの六年は酷かった。マルコスに直言しようとする、体調を理由にイメルダから接触を拒まれた。マルコスを裸の王様にしたのはイメルダだ。イメルダは、自分が欲しいものを手に入れるためには悪魔とでも手を組む女だと言っていた」

これを聞いた男が、やっと、反応した。

「そうですか。イメルダは、自分の物欲を満たすために公金を湯水のように使ったのを隠す目的で、マルコスは山下財宝を掘り出して財を成したという新聞発表をしたんですな」

マルコスの不正蓄財が取り沙汰されるようになったのと前後して、イメルダは、新聞記者を集めて、山下財宝発掘の発表をしている。この男は、それを不正蓄財隠蔽のための作り話と考えているのだ。

——何だこのやろう。財宝発掘は嘘だと思っ
んじやねえか。だったら、わざわざ調査することはないだろうに。

「それが分かかっていて、何で調査をするのかね」

マハン は、声を荒げ、前にも増して棘を鋭くした。だが、男は、そんなことは、どこ吹く風だ。心臓に毛が生えているのだろう。

「はい。プロジェクトを立ち上げるにあたり、我々は二つの可能性を考えました。一つは、もちろん、マルコスが軍隊を使って財宝を掘り出したというケースです。もう一つは、イメルダの発表が嘘だったというケースです。第一のケースの場合、日本はフィリピン政府に返却を求めます。フィリピンに隠された財宝は、敗戦を見越して英米による強奪を避けるために各地に分散した天皇家の財産の一部だからです。しかし、フィリピン政府にその能力がないのが現実です。我々は、むしろ第二のケースを望んで

います。この場合、日本は、フィリピン政府に、共同プロジェクトを提案します。発掘費用は何百万ドルにもなるでしょうが、フィリピンの内需を喚起します。発見された物を折半するとしたら、フィリピン政府には国家予算の一年分を超える金が転がり込みます。日本にとっても、何の見返りもない経済援助より、よほどましな話です。いずれにとつても損のない話です」

マハンは、過去に、大言壮語して金を騙し取ろうとする多くの詐欺師に接した。この男は、その類の人間のようなが、通常の詐欺師とくらべ、どこか隙がない。弁舌爽やかなのは詐欺師に共通しているものだが、なかなか頭も切れそうだし、度胸もありそうだ。ロジックもしっかりしている。金をせびりにきた様子もない。信用していいのかな、と思うが、これまでの経験が警告を発し続けている。

「随分、ロング・ショット、いや、荒唐無稽な話だ

な」

「はい。私も、個人的には荒唐無稽だと思つていますが。だから非公開プロジェクトであるわけですが」

おかしいと指摘されたら素直に認める。これが詐欺師の常套手段だというのをマハンも熟知している。少し皮肉を言いたくなつた。

「しかし、一国の首相が埋蔵金探しとはどういうことかね。安倍首相とやらは変わっているんだな」

「はい。お友達と呼ばれる経験の浅い取り巻きを登用しましたから、おかしな話が多いのです。……じつは、私は、ハーヴァードを出てメリルリンチに勤めていた頃、マルコスの資産運用を担当していました。そんなことから、今回、プロジェクトにヘッド・ハンティングされたのです」

マハンも、男が、Rを発音しない、ちよつと気取つた東部訛りを話すのに気付いていた。ハーヴァード出というのは本当かもしれない、と思うが、アメ

リカのビジネス社会には、ハーヴァード出などゴマンといる。できる奴もいるが、できないのも結構多い。出身校で人物を判断していたのでは、粕ばかり掴むことになる。そもそも、バンカーを内閣府の財政顧問にというのはなら理解できるが、調査チームにというのは胡散臭い。マルコスの資産を運用していたというのも、にわかには信じがたい。あれだけ秘密裏にことを進めていたマルコス一族が、アメリカに運用するような資産があつたのを漏らすことを許すはずはないからだ。

「アメリカの投資銀行から日本の内閣府とは、ずいぶん、思い切つた転進だな」

「はい。じつは、マネー・ゲームに飽きて、政治にかかりたいと思つていたところでした。そういう意味で渡りに船でした」

突然、身の上を打ち明け、心を開いたという演技をする。これも詐欺師の常套手段だ。胡散臭い限り

だ。マハンは話を打ち切ることにした。

「私は、アートから山下財宝の話を、一切、聞いていない。これ以上時間を無駄にするのはよそう」

「分かりました。……では、最後に、一つだけ質問させてください」

「ああ。いいよ」

マハンは、得体の知れない男から解放されることの喜びで、思わず気を緩めた。

男は、アタッシュケースから、アルイザの著書を取り出した。

「これには、アルイザ氏が見た最後の日が、克明に記されています。気になることが幾つかありますが、我々が、特に問題にしているのはここです」

男は、

『四人のアメリカ兵が、金の袖なしコートを纏い、大粒のダイヤモンドをちりばめた金のネックレスを首に掛けた四フィートほどの金無垢のセント・ニコ

像と、金の延べ棒が入った箱、イメルダの宝石類を詰めた箱、そして、その他の物を入れた箱をヘリコプターに積み込んだ」

と記されている箇所を指差した。四人で持ち上げるぐらい重い箱となると、一個百キロは下るまい。それぞれが一個ずつにしても、かなりの額の財産だ。「このその他の物は、コーテーシヨン・マークで囲まれています。ということは、山下財宝ということですよ」

「そうだろうか……」

出版資金を援助したハマンは、原稿も含め、本の隅から隅まで目を通したつもりだったが、その部分に何ら疑問を抱かなかつたことに気付いた。不意をつかれたような感じで、答えに力がない。

「ところが、山下財宝は約六千トンの金、すなわち、二十トン車で三百台分の金です。とてもヘリコプターで運び出せる量ではありません。同時に、人知れ

ず運び出せる量でもありません」

「何を言いたいのかね」

金は汗を流して得るもの、と考えているマハンだ。一攫千金の財宝話などに興味はない。興味も関係もないことなのに、ちよつと気を緩めた際に、男に先手を取られような気がして、いささか、気分が悪い。

「はい。私は、アルイザ氏がイメルダの援助をした。すなわち、後日、フィリピン政府から不正蓄財の返却を求められることを予測して、マルコスが財を成したのは山下財宝を発見したからだというイメルダの主張を、こういう形でバック・アップしてやつたと分析しています」

——なるほど、そういう解釈もなりたつ。しかし、アートはイメルダを嫌っていた。……ひよつとしたら、マルコスの子供たちのためを考えてやつたことなのかもしれない。そうであれば理解はできる。しかし、事実がどうであれ、この胡散臭い野郎に賛同

したくない。

「アートは、そんな芸当ができる男ではない。単純に、その他重要なものというぐらいの意味だと思っ
ね。どっちにしても、山下財宝などというものは、
日本政府が首を突っ込むことではない。……きみ、
もうこれでいいだろ。終わりにしよう。グッド・デ
イ」

マハン は、立ち上がって、手を差し出した。

男は、それを平然と受け、札を述べて、ドアに向
かった。

だが、ドアのノブに手を掛けて、何かを思い出し
たかのように振り返った。

「マハンさん。マルコスのアタッシュケースのこと
で何か聞いておられますか？」

マハン は、アルイザが、「亡命が決まった直後、熱
でふらふらしていたマルコスは、寝室に備え付けの
金庫の番号を思い出すことができず、開けるのを諦

めたが、ベッド脇に置いてあったサムソナイト製の
茶色のアタッシュケースを、『どんなことがあっても、
これを手放すな』と言って侍従に持たせた。ハワイ
の病院に着いた後、マルコスは、家族が期待して見
守る中、それを開けた』と書いていたのを思い出し
た。

「中から丁寧に畳まれた国旗が出てきて、家族は、
あつげに取られたと書いていたはずだ。現在、故郷
のバタックで冷凍保存されている遺体を包んでいる
旗がそれだ」

ほっとしたやささきの質問に、思わず正直な返事が
口をついて出た。刑事コロンボが使った古い手だが、
さすがのマハンも、まんまとそれに引っかけた。

「その通りです。家族が驚いたというのは正しいで
しょう。しかし、それは、事実の半分を語っている
だけです」

「半分？」

「はい。アタツシケースには、もつと貴重なものが入っていたはずです。いや、入っているはずだったものが入っていなかったというのが正しい言い方です。あるべきものがなかったから驚いたのです。ご存知でしょうか？」

「そんなことはアートのから聞いていない」

「そうですね。それが本当だとしましたら、伝えたくとも伝えられなかったのだと思います」

「どういう意味だ」

「山下財宝の埋蔵場所を記したものが入っているはずだったからです」

「何だって？」

「マハンさん。日本軍の記録によると、マルコス、バギオ付近で抗日ゲリラをしている時に山下軍の捕虜になっています。ところが、マルコスの自伝には、その記載がありません」

「それとこれとは関係ないじゃないか。そもそも、

マルコスは、開戦時にバターンで米兵と共に捕虜になり、死の行進中に脱走している。マルコスには、捕虜になったのを隠す理由はない」

「いえ。あるんです。マルコスは、山下軍に命乞いをして助かったのです。いや、命乞いというよりは、ダブル・エージェントになったと言う方が正確です。だから、自伝には書けなかったのです」

「信じがたいね」

「信じる信じないは、どうでもいいことです。重要なのは、マルコスは、米軍がバギオに乗り込む前に、山下将軍が隠れていた防空壕を物色したということ、そして、その時に、財宝の埋蔵場所を記したコード（暗号）を入手したということです」

「どっち道、あて推量だろ」

「いえ、マルコスが、終戦前に埋蔵場所を示すコードを記したメモを入手したというのは、知る人ぞ知る事実です。解読できていないというのも周知の

事実です。私は、アルイザ氏は、亡命のどさくさに紛れ、そのアタツシユケースを開けてメモを盗んだ人、あるいは、盗むことができた人を知っていたと睨んでいます。マハンさん、あなたは、そのあたりのことをお聞き及びのはずです」

——結局、こいつは、そのコードとやらを探しているだけのことだ。日本政府の名前を出せば、俺がへいこらすると考えたんだろが、甘いよ。

「さつきも言っただろう。私は、アートから山下財宝に関する事など、一切聞いていない。さあ、もういいだろ、帰ってくれたまえ」

と、荒々しく言い切ったマハンは、原稿段階では「国旗が出てきて家族が驚いた」ではなく、「国旗と一緒に入っていたあるものがなかった」となっていたのを思い出した。それは、この男が言うメモでないことだけは確かだ。だが、何がなかったのか記憶にない。眉間に皺を寄せ、

——あれは何だったんだろう。推敲時に、わざわざ書き換えるほど大事なものであったのだろうか？

などと考えていると、男がドアを開けた。「グッバイ」と言おうとして、マハンは、もう一つオフレコの話の思い出した。

「手土産に、もう一つ教えてやろう。マルコスとエンリレは、最後の瞬間に和解したんだ」

ヘリコプターを待っていたマルコスに付き添っていたアルイザは、マラカニアン・パークの街灯が当たらない木陰に立つ一人の男を認めた。密かにマルコスを見送りにきていたエンリレだった。それを耳打ちされたマルコスは、誰にも気付かれないように、そっと人の輪から抜け出した。三十年以上、共に戦ってきた二人が、二言三言、言葉を交わし、長い長い抱擁を交わしたのを見ていたのはアルイザだけだった。

男は、そんなことは知ったことか、とばかりに肩

をいからせて足早に立ち去った。

マハンは、その背中に向けて「俺とアートの仲だつて同じことさ。アートの秘密は、俺の秘密だ。よしんば俺が知っていたつて、口を割るはずがないだろ」という無言の言葉を投げ付けた。

第一章 武者顔の男

昼の太陽が文太の臉を真つ赤に染めている。

二〇〇七年二月。大下文太は、フィリピンの新興リゾート、ブラカイに建てられたばかりのファイヴ・スター・ホテル、ブラカイ・インターナショナルのビーチに置かれたデッキ・チェアーに海水パンツ姿の身体を横たえている。遅い朝食後の腹ごなしに、と出かけたサンゴ礁でのスノーケリングから戻り、一息入れているところだ。

その白さが売り物の白砂の照り返しが、南国特有の暑さに輪をかけ、チェアー周りの大氣をサウナ状態にしている。

額に吹き出た汗が流れとなり、一筋、二筋、頬をつたつた。

——暑い！ 白砂青松はいいけど、いや、白砂青椰

子とでも言うべきなんだろうが、この照り返しは半端じゃない。フィリピンの二月は乾季で、気温が低いという記憶があったから来て見たんだが、やっぱり常夏の国だ。めっちゃ暑い。

文太は、三十年ほど前に、三年ほどマニラに駐在したことがある。その頃の記憶から、暑さが抜けているのは、自分が若かったからだということに気付いていない。

目を閉じたままタオルで流れる汗を拭っていた文太が、足元に人の気配を感じ、薄目を開けると、細長い視野の真ん中に、文太を指差して何かを言っている十歳前後の兄弟と思しき二人の子供の姿がある。

十年過ぎたアメリカからオーストラリア最大のリゾートであるゴールド・コーストに移り住んで七年になる文太は、四年ほど前に地元の食品会社を辞め、リタイア・モードに入ってから以降、週三日のゴルフを自分に課している。真冬のごく短い期間を除

き、踝までのソックスと半袖、半ズボンという出で立ちでコースに立つので、首から上と二の腕から先、そして、膝頭から踝の間だけが土方と間違われそうなほど日焼けしている。

二人の子供は、黒褐色と白が市松模様をなしている文太の身体を見て、気味悪がっているようだ。

——こう見えても、白人女性から「日に焼けたオリブ色の肌がセクシー！」って言われることもあるんだぜ。

と思いつながら、すぐ側で砂遊びを始めた二人を見るときもなしに見ていると、慣れないスノーケリングの疲れが出たのか、にわかには目が重くなった。

意識が途切れて数分、子供の声で目が覚めた。先ほどの兄弟が何かをめぐって言い争いをしている。兄と思われる大柄な子が手にしている金色のものは、ビールの王冠のようだ。それを取り戻そうとしてい

るのだろう、ポッチャリ型の弟が叫んだ。

「#%&\$@*」

大小七千余の島と百十一の民族から成るフィリピンには、異民族間はもとより、島の表と裏で意思疎通ができないのが稀ではないほど、単語と文法が異なる八十七の言葉がある。

マニラに三年駐在した文太だが、マニラがあるルソン島を中心に使われる言葉で、フィリピンの国語でもあるタガログ語を喋ることはもちろん、聞き取ることもしかない。しかし、音の感じで他のものと区別することはできる。弟が口にした言葉は、ブラカイで使われるアクラノンではなく、タガログだ。

——この兄弟はマニラから来ているらしい。
などと観察していると、ふたたび、弟が叫んだ、

「\$#@* ヤマシタ #@%&*」

——ヤマシタ？ 山下大将のことかな？ 山下大将がどうしたって言うんだらう？ 弟が見つけたビール

の王冠を兄が横取りしたという図式のような。フィランドには、ロシアのバルチック艦隊を破った聯合艦隊長官、東郷平八郎を称えた「トーゴー」というラベルのビールがあるらしいが、フィリピンには、ヤマシタ・ビールでもあるんだらうか？ ここには、サンミゲル・ビールしかないと思っていたんだが。

二人が小競り合いをしながら走り去るのを目の片隅で捕らえながら、大きく伸びをし、首を回していると、スペインの血が混じっているのだろう、鄙にはまれな明るい肌をしたウェイターが近付いてくるのが目に入った。昨日、チェックインしてからというもの、文太が目にした従業員は、みんな色白だ。白い肌をもつて極上とするフィリピンのファイヴ・スターのホテルらしく、ウェイターやウェイトレスに色白を揃えているようだ。

——アメリカでは、ウェイトレスに金髪を揃えただけで人種差別だとか、へったくれで大問題になるん

だが、この国は遅れている。……いや、ラテンの血が入った南方民族のおおらかさと言うべきかも知れない。

などと思っていると、その二十歳には程遠いと思われる細身のウェイターが、

「失礼いたします。何か冷たい物でもいかがですか？」

と、大げさに舌を巻いてRを発音するフィリピン英語で聞いてきた。

——いつだったか、アメリカで知り合った親日家に、「日本語にはRの発音はない」と言ったら、「いや、ありますよ。江戸弁で、バカヤローと言ってく下さい。あれがRの発音です」と言われたことがあった。などということを頭によぎらせながら文太が答えた。

「サウンズ・グッド（そいつは、いいね）！ うーん。そうだな。ピール、いや、カラマンシー・ジュ

ース（金柑ほどの大きさで酸味のある柑橘類のジュース）にするか。いや、もう昼飯時だ。レストランに戻ってオーダーするよ。ノー・サンキュー」

文太が太陽の高さを見て答えた。

「それでは……」

と、引き下がろうとしたウェイターを文太が引き止めた。

「ちよつと聞きたいことがある」

「何でございましょう」

「さつき、そこに子供が二人いただろう」

「ええ、ここの常客の息子さんですが、何かご迷惑でもおかけしましたか？」

ウェイターが戸惑いを顔に浮かべた。

フィリピンの経済は数パーセントの財閥が握っているとされている。さきほどの兄弟も銀の匙を口にして生まれてきた口らしい。

「いや、迷惑はかけていない。さつき、小さいほう

の子が『ヤマシタ』と言ったのを耳にしたんだが、
どういう意味かと思つてね」

「ヤマシタですか？」

「うん。そうだ」

「失礼ですが、あなたは日本人ですよね」

フィリピンの礼服であるバロンタガログ風にしつ
らえた白いユニフォームの袖が短いのか、袖口を手
で引つ張つていたウエイターが、「日本人のくせに、
そんなことも知らないの？」と言いたげに、こころ
もち顎を上げ、文太を見下すように聞いた。

「もちろん、私は見てのとりの日本人だ。だから
『ヤマシタ』を聞き取ることができた」

「ジェネラル・ヤマシタ（山下大将）のことです。
日本のジェネラルですよ。ご存知でしょうか？」

「年配の日本人でジェネラル・ヤマシタを知らない
人はいない。ここでもそうだろう？しかし、なぜ年
端も行かない子供がヤマシタと言うのかね？」

文太は、「マレーの虎」と称された山下奉文（とも
ゆき）大将がフィリピンで囚われ、絞首刑に処され
たのを知っている。フィリピンには「ジェネラル・
ヤマシタ・ロード」と呼ばれる道が残っていること
も知っている。だが、先の戦争を知るはずがない子
供が、なぜ「ヤマシタ」と言うのか理解できない。

「子供が言つたのは、ヤマシタズ・トレジャー（山
下財宝）のことです。ジェネラル・ヤマシタが隠し
たという財宝話がフィリピン中に残っていて、いま
だに多くの人が探しています。そんなことから、子
供たちは、金色の物とか、光つた物を見つけると、
ヤマシタを見つけたと言うんです。あの子達も、砂
遊びをしていて、何かを見つけたのだと思います」

「そうか、山下財宝か。なるほど」

———そういえば、二人はビールの王冠を取り合つて
いた。ヤマシタというのは、子供が普通に使うぐら
いポピュラーなんだ。知らなかった。

「ヤマシタ財宝を探している人を知っています。何でしたら紹介いたしますが？」

先ほど、見下げるような態度を示したウエイターが、今度は顔に媚を浮かべている。

——俺が、ちよつと興味を示したらこれだ。油断ならない。

「ノー、サンキュー。私はサイエンティストだ。そういう話に興味はない」

「確実な話らしいんですがね。興味がありませんか。残念です。……私の名前はジュンです。気が変わったらフロントに私を呼ぶよう命じてください。いつでも参上します」

——いつでも参上か。こんな若造までが、「日本人はいい鴨だ」と思っているんだ。フィリピンは、いつまでたっても変わらない。

と、三十年ほど前の出来事を思い浮かべた。

文太が始めて訪れた一九七四年のマニラは、カー

フュー（夜間外出禁止令）がしかれた直後で、繁華街における真つ昼間の銃撃戦こそなくなっていたものの、ビルというビルの入り口には銃を手にしたガードマンが立つという、平和な日本でノホホンと育った世間知らずには不気味な町だった。

現地との合弁で発酵工場を建設することを目的としたプロジェクトの現地業務を一人で取り仕切っていた柳生課長のアシスタントとして派遣された文太が、マニラのビジネス街、マカティに置かれた仮事務所に顔を出し、真つ先に手渡されたのは、その不気味なマニラの市街図だった。

「日本人だと分かると、タクシーの運ちゃんが強盗に早変わりするから、まず地理を覚えろ」

と言われ、驚いていると、さらに、

「客が地理に不案内なのをいいことに、人影のないところに連れ込んでホールド・アップというのが手口だ。タクシーに乗ったら行く先を告げずに、交差

点ごとに方向を指示しろ。真つ直ぐはデレチヨ、右はカナン、左はカリワ」

と、タガログまで教えてくれた。

「歩道は真ん中を歩け。建物側を歩くと、建物と建物の間の暗闇に引つ張り込まれる。車道近くを歩くと、通りすがりの車にカバンや腕時計を引つ手繰られる」

とも言われた。

後日、プロジェクトの進捗と共に増えた日本からの出張者の中に、同じ日に二度、タクシーの運ちゃんにホールド・アップされた間抜けがいたし、真つ昼間の繁華街で腕時計を引つ手繰られた人もいた。身を守るには、どちらも適切なアドバイスだったのだ。

プロジェクトが進み、工場用地をレイテ・オクモック市郊外に求め、地鎮祭をすませた頃のことだった。ゼネコン選びのために派遣されてきたエンジニア

アの一人が、週末の一日、単身、マニラの中心、エルミタにあるリサール・パークを訪れた。

ガイドブックを手に、国民的英雄と仰がれる独立運動の闘士、ホセ・リサールの像に向かつて歩いてみると、三十歳前後と思しき男が声をかけてきた。

「失礼ですが、あなたは日本人ではありませんか？」
「そうですか？」

戸惑い顔で返事をしたエンジニアに、その男は、
「やっぱりそうですか」

と、興奮した様子で、自分は日本兵の落とし子であること、父親と同年代の日本人を見ると自分の父親のように思えることなどを伝え、

「私の家で、お茶でも飲みながら、ゆっくり話でも」と持ちかけてきた。

英語が苦手な人なら、相手にならず行き過ぎただろうし、用心深い人なら、即座に断つたであろうが、人を疑うことを知らない、人情に厚いエンジニアは

「日本兵の落とし子」に心をくすぐられた。生鬻りの英会話の腕試しを、という思いもあった。つい、誘いを受けてしまった。

公園の脇に止めてあった、床に穴が空き路面が見え隠れする、走るのが不思議なほどのボロ車に乗せられ、軒が傾いたボロ家に案内され、ワイフという女性に紹介された。

扇風機が大げさな音をたてている部屋で、生温いビールを振舞われ、片言の英語で世間話をしていると、男は、

「ワイフはバロンタガログの縫い子をしている。あなたと知り合いになった記念に一着作らせた。ついでに寸法を取るのでズボンを脱いでくれ」と言う。

——ズボンの寸法を取るのに、わざわざ脱がなくなるとも。

と、思ったが、英語が出てこない。うやむやのう

ちにズボンを脱がされ、巻尺で寸法を計られた後、ビールをもう一杯ご馳走になり、リサール・パークまで送り返された。

「一週間後、同じ時間に、ここで」

と言いつ残して、そそくさと走り去った男の態度に違和感を覚えたエンジニアが、ズボンの後ろポケットを確かめた。間違いなくサイフはあった。念のため、と中身をあらためて、仰天。ホテルを出る前に両替したペソ紙幣が、一枚残らず姿を消していたのだ。

——日本人は、危機に対する感度が鈍い上に、相手を必要以上に慮るばかりに、はつきりと「ノー」と言わないからトラブルに巻き込まれる。結局、日本人は、平和ボケ、安全ボケした、おめたい民族なのかもしれない。

と、ニューヨークの一流ホテルで、みえみえの美人局に引っかけた会社の偉いさんや、オーストラ

リアで、年寄りのストーカーに追いかけられて困っていた女子留学生を思い浮かべた文太は、ウェイターの後を追うようにチェアーを離れた。

モカシンの底に砂の熱さを感じながらホテルのロビーに戻ると、エメリーが、申し合わせたかのようにエレベーターから降りてきた。

「あら、ちょうどよかったわ。ランチでもと思って下りてきたのよ。プール脇で食事をしない。空気がいいから食べ物も美味しいわよ」

「いや、今の今まで、サウナに入ったような大汗をかいていた。クーラーが効いたところがいい」

二人は、ロビーの奥にあるレストランに席を取り、色白のウェイトレスが手渡してくれたランチ・メニューに目を通した。主体はハンバーガー、サンドイッチ、サラダだが、その後には、ライス・メニユーが並んでいる。

——なるほど、KFCにライス・メニユーがあるほどの米食の国だから、ファイヴ・スターのホテルでも、ライス・メニユーが必要なんだ。……メニユーからすると、このホテルはアメリカ系のような。クラブ・サンドイッチにするか。

オーストラリアに移住する前の十年間をアメリカで過ごした文太は、アメリカ東部の社交クラブで考案されたと言われるクラブ・サンドイッチ、三枚のトーストしたパンにロースト・チキン、ベーコン、エッグ、レタス、トマトを挟んだサンドイッチが好きだ。それを食べれば、アメリカ系レストランのレベルが分かるとも思っている。

文太はカラマンシー・ジュース二杯とクラブ・サンドイッチを注文することにした。チキン好きなエメリーはチキン・サラダとカラマンシーだ。

「クラブ・サンドイッチとチキン・サラダ、それと、カラマンシー・ジュースが都合三つ、食後にコーヒ